

模範解答

スポーツツーリズムは、スポーツ活動や観戦と観光を結び付ける旅行形態であり、近年では、スポーツと地域の文化・芸術資源などとスポーツを結びつける「スポーツ文化ツーリズム」も推進されている。日本政府もスポーツ庁、文化庁、観光庁の連携の下、その推進を図っており、地域振興や観光需要の拡大に加え、教育的価値の創出や健康増進といった多面的な効果が期待されている。スポーツツーリズムは観光政策の枠を超え、教育、人材育成、メンタルヘルス、地域マネジメントなど幅広い分野と関係しており、その価値と課題を総合的に検討する必要がある。

第一に、政策・戦略上の意義として、地域経済の活性化が挙げられる。スポーツ大会やイベントの開催は、宿泊業、飲食業、交通事業など幅広い分野に経済効果をもたらす。特に人口減少が進む地方では、交流人口の拡大を通じた地域活性化が重要な課題であり、スポーツツーリズムはその有効な手段と考えられる。また、参加者がリピーターや関係人口となることで、継続的な地域との関係構築も期待できる。

さらに、スポーツと歴史、文化、食、自然環境などを組み合わせることで、地域独自の魅力を発信することが可能となる。これにより観光客の滞在時間や消費額の増加が期待されるだけでなく、地域ブランドの形成にもつながる。

また、文化交流の促進という意義も大きい。国内外から訪れる参加者や観光客との交流は、異文化理解や国際感覚の醸成に寄与する。加えて、地域の文化や歴史を学ぶ体験型プログラムを取り入れることで、学校教育を補完する実践的な学習機会を創出することができる。

第二に、教育、育成、メンタルヘルスとの関連性についてである。スポーツ活動への参加や大会運営等の経験は、協調性、主体性、リーダーシップなどの非認知能力の育成につながる可能性がある。特に若年層が大会運営やボランティア活動に参加することは、コルブの体験学習理論が示すように、実践を通じた学びを促し、責任感や課題解決能力の向上につながる。これは学校教育だけでは得難い経験であり、人材育成に資する。また、スポーツツーリズムは体験型学習や異文化交流の場としても機能する。参加者は地域の自然や歴史、文化に直接触れることで地域理解を深め、郷土への愛着や地域への関心を高める契機となり得る。さらに、オールポートの接触仮説が示すように、対等な立場で共通の目標に向けて協力するなど、適切な条件の下で多様な人々が交流することは、相互理解の促進につながると考えられる。

メンタルヘルスの観点からも、本旅行形態は一定の効果を有する。スポーツ心理学や健康科学の研究では、身体活動がストレス軽減や気分改善に寄与することが示されている。また、旅行は日常生活から離れて気分転換や休養の機会となる可能性がある。さらに、イベントを通じて地域住民同士の交流が活発化し、地域への帰属意識や人とのつながりが強化されることは、パットナムのソーシャル・キャピタル論という社会関係資本

の形成につながる。こうした社会関係資本の充実、孤立感の軽減や精神的健康と関連すると考えられる。一方で、混雑や騒音、運営負担の増大が住民のストレス要因となる可能性もあり、効果を過度に楽観視することはできない。

第三に、地域マネジメント上の課題と対応策について述べる。主な課題としては、財源や専門人材の不足、イベントの単発化、安全管理、環境負荷への対応、住民理解の確保などが挙げられる。特に地方自治体では、事業を継続的に運営するための人的・財政的資源が不足している場合が多い。

これらの課題に対応するためには、地域スポーツコミッションなどを核として、自治体、観光事業者、スポーツ団体、学校、住民組織などが連携する協働体制を構築することが重要である。また、住民が企画段階から参画できる仕組みを整え、事業への理解と当事者意識を高める必要がある。さらに、観光消費額だけでなく、教育効果や住民満足度なども含めて効果を測定し、継続的な改善につなげることが求められる。加えて、地域文化や自然資源を生かした継続的なプログラムを展開するとともに、安全対策や環境負荷の軽減を進めることが持続可能な運営につながる。

以上より、スポーツツーリズムは観光振興にとどまらず、教育、人材育成、メンタルヘルスの向上、地域コミュニティの形成など多面的な価値を有している。一方で、財源確保や人材育成、住民理解、安全管理といった課題も存在する。そのため、経済効果だけでなく教育的・社会的価値も含めて総合的に評価し、多様な主体の協働による持続可能な地域マネジメントを推進することが重要である。